

討論 (2010年度 公開シンポジウム報告 父親の子育て 母親の子育て)

著者	大日向 雅美, 新道 賢一, 川口 彰範, 濱田 智崇, 中里 英樹, 根ヶ山 光一, 穂刈 千恵, 高石 恭子
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	12
ページ	52-72
発行年	2011-02-28
URL	http://doi.org/10.14990/00002711

討論

高石 後半第二部といたしまして、討論の先生をお願いしております。一番遠いところにお座りですが、穂苅千恵先生です。現在は山王教育研究所で臨床心理のお仕事をされております。同時に、甲南大学の非常勤講師としても遠路東京から通ってきておられます。ご専門は臨床心理学、ユング心理学です。実は先生はこの五年間の共同研究のプロジェクトの最初から、私と共同企画者としてずっと一緒に進めてきた仲間でもあります。この春職場を移られるということで離れてしまわれたんですけども、一緒にやってきたチームの仲間として、半歩足を外に出したところから、程よい距離でのご指摘などもいただけるかと思っております。それでは、穂苅先生、よろしく願いいたします。

〈指定討論〉

穂苅 こんにちは、穂苅です。今年度は甲南で非常勤として仕事をさせていただいていますので、建物やこの教室の一員的な

感じをもちつつ、昨年の今頃とは違って全体を味わっているような感じで今ここにあります。先生方のお話に対して、私なりの視点から感想を交えつつ、全体討論のきっかけになるよう、先生方への、質問事項みたいなものをお話ししたいと思います。その始まりとして、私が子育てに関して、臨床心理学の立場から普段どのような現場にいるかということについて、簡単に紹介します。そのほうが、これから申し上げる論点を私が持ち込む理由を皆さんに察していただきやすいかと思えます。

普段私が臨床心理の支援の現場としているところは、保健所の乳幼児健康診断や子育て困難を抱えるお母さんたちのサロン、あるいはもう少し子育て困難でSOSを出すことが難しいお母さんやお父さんのアウトリーチ（訪問型の支援）など、保健所をベースとした保健師さん、助産師さんたちとのチーム活動や事例検討の現場です。それと、名称は出せませんが、かなり大きな企業で、「いろいろな世代の人たちの意識をさりげなく刺激してほしい」と言われて、小さなミーティングに参加することがあります。五、六人から百人ぐらいのものまであります。たまに行ってはちょっとした対話をするようにしています。ほとんどが子育てと仕事に関連のある対話です。三つ目がルーティンワークにあたりますが、ある精神科のクリニックや、精神科とは別のカウンセリングルームでカウンセリングをしています。ここでは子育てをしている親御さんの子育て相談もあり

ますが、不眠ですとか、夫婦の悩みですとか、自分の親世代の介護との関係で子育てのことが話題になることもあります。あるいは、親も頑張っているんだけど、いろいろな事情があって、それを子どものほうが背負っている場合、子どもがサインを出すことがあります。そうしたケースでは、悩みや問題行動を持った子どもの遊戯療法を担当することになります。

今日の先生方のお話の中に、回数は少ないですが共通して、子育てしながら「悩む」「不安に思う」という話がありました。そのような子育てに関する心の動きに臨床心理学的にアプローチする仕事をしていますので、そこにフォーカスを当てて質問させていただけようと思います。

結論を先に申します。「みんな迷うわよ」「みんな悩むわよ」という決めゼリフをよく聞くと、思います。「私もあったわよ」と言われて、「なんだ、そうか」とほっとする。そういう意味では、「悩む」「迷う」「疲れる」ということはなくなることに子育てにとってよい、あるいは子育てをしている人々にとつて程よいのではなく、「健やかに、健康に迷って、疲れる」、そんなことができればいいんじゃないかなど。迷うことは異常なことではないという発想で、普段いろいろな支援の仕事や臨床的な仕事をしています。

今日は母性神話、母性愛神話という言葉が出てきましたが、日本の場合、絆という感覚がどうしても、つながっている実感

とか、一緒にいる時間の量とか、目に見える距離にいかどうかという、くつつく側面から意識されやすいと思います。それを確かめて、子育てができてきているか、あるいは子どもにとつていいことは何かを測ろうとする。これは世代を超えて、かなりあるような気がします。

でも、絆というのはくつつくだけでは、親が子どもを支配することになったり、過干渉になります。私が思春期の頃にも報道で見聞きましたので、かれこれ三〇年くらい、ずっと日本では「くつつきすぎはよくない」と言いつつ、絆というかどうかでもくつつく方になってしまう。絆の中にくつついたり離れたりする。今日のテーマにもなっている、「離れること」と「くつつくこと」を両方入れ込んで意識することが私たち日本人の中になかなか育ちにくい、という傾向をよく感じます。

このような子育てを巡る意識をとらえるために、高石先生と研究会で考えてきたとらえ方の一つに「子育て意識」という考え方があります。この子育て意識はごく普通の日本語なのですが、少し専門的に、子育てに対する人々の意識の動きをとらえて、今私たちが使っている言葉です。

この言葉の下に「間主観」があります。間主観というのは心理学の中でも使われているものですが、ほかの領域でも使われています。私たちは、目に見え触れるものが客観で、心で思うことが主観だということらえ方に慣れていますが、実際は主観と

客観を分けて考えることには限界があります。

大日向先生のお話の中では、列を乱しても自分がそこに入ろうとしたことを大事にする人も、列を乱さないで後ろにつくルールを大事にする人も登場しました。その現象に対してどのような意味づけをするか、意識を持つか、場合によってはストーリーを構成していくか。このあたりの主観と客観が重なったものを割り切らずにとらえていく。これからはどうしてもそういうことを考えていかなないといけないのではないかと。

男性と女性の特徴もそうですが、私たちは分けて整理するほうが楽なので、分けて整理して納得しようとする。そして、AとBに分けて、Aが増えればBが足りないと言って全体を補おうとするし、Bが増えすぎればBを減らそうとする。いつも片側の問題を指摘するということは、どこか二つに分けすぎているのではないかという反省が最近の臨床心理にはあります。子育て意識についても、こんなふうにとらえながら研究会であれこれ考えています。

二番目のシンポジストであった新道さんたちの発表につながることで、私たち専門家はさまざまな領域で子育てをしている特に専門ではない人と、子育て意識をどのように考えていけばよいか、考えています。三〇年前から「絆、絆」と言っているのに、世の中全体の意識はなかなか進展していないと思うんですね。「育児の悩み（場合によってはノイローゼ）」は、お

父さんの育児参加と社会、あるいは地域のサポートで減る」。

ここで言うノイローゼは非常にポップな感覚で使っています。これと似たようなスローガンは本当に二〇年か三〇年くらい前からあった気がするんですね。変わらないなあと思います。別に変わることがいいことだとは思わないですけれども、だからどうするんだろうというのはなかなか出てこない。その一方で、お父さんや社会のサポートの本身は確実に増えているかもしれない。それで今日のような会が成立しているのだろうと思えます。

中里先生や新道さんたちの研究の中に出てきたものは、お父さんのほうに焦点が当たっています。新道さんのインタビューは私も詳細を知っているので申し上げますが、初めに「子育ては楽しいですか」と聞いています。お父さんにもあえて聞いているわけです。「子育ては楽しいですか」と二ニュートラルな声で語りかけます。そうすると、「はい」とか「いいえ」のどちらかを選ぶ人はほとんどいなくて、「えっ？ えっと」という感じで始まるんですね。

お父さんに関しては、先ほどの新道さんたちの発表にあったように、楽しいかどうか答える前にまず、自分が子どもと暮らしている状況を子育てと言っているのかどうかというせりふが出てくる。子育てをしていると言っているのかどうか。それなりにしているんだけれども、子育てということに対する一人の人

としての素朴な自信が持ちにくい。

この持ちにくさをもっと心理的に細かく見ていくと、おそらく誰にも言わなければ、個人の中では「結構俺なりにやってるじゃん、この仕事にしては」なんて思っている。パソコン好きの方であれば、ツイッターにちよつと書いたり、ブログに書いてたりしているかもしれない。ここで取り上げたい「持ちにくさ」は、人前で声に出すような自信の質と考えてください。新道さんたちの発表で、したいことの中に「知人と話す」という回答が意外と多かった。このあたり、子育てに対する自信、もしかしたら実感とか手応えと言ってもいいかもしれません。発見も含まれるかもしれませんが。子育てについて、人前で意識して声にすることは起こりにくい。それはどういう子育て意識なのか。あるいは、男性、女性の何と関係するのか。

中里先生も、自信がないということについて触れていたと思います。中里先生のご発表では、可視化の問題で、中里先生自身の写真を見せてくださいました。オーストラリアなどに行かれると、人前で自分が子育てしている姿ももちろんですけど、意識して声に出しやすい。風土が違つとその意識が声になりやすくなるヒントとか仕掛けがあるのかどうか、何か思われることがあれば、ぜひうかがつてみたいと思います。新道さんたちのチームにも、このあたりで思うことが何かあれば教えてください。

それから、二つ目が他世代の共有ということです。これは大日向先生のお話を伺いながら特に思ったことで、高石先生も大日向先生の話を含括される形で話されていました。例えば週末にやつとお父さんがくつろいでいるところに、「これがあつて、あれがあつて、どうすると思う？ こんなことがあつたのよ」とわーと言うと、また始まつた、と男性の側は思う。「で、結論は何なんだ？」と聞きたくなる。このやりとりで大日向先生から「住む世界が違うんだ」というご説明の言葉をいただきました。それは子育て意識との関連でいきますと、男性と女性、専業主婦の方と外でお仕事をしている男性の間だけではなく、女性自身の間でも仕事私の私と子育ての私の間で子育て意識の質の違いといえますか、シフトという問題がすごくあると思います。

例えば大日向先生に少人数の支援の場などで質問を投げかけると、「住む世界が違うということなんじゃないか」プラスαの言葉をもらう。左の「咀嚼」に該当すると思いますけれども、投げかけると、大日向先生がそれをかみ砕いてくれる。ちょうど赤ちゃんの離乳食を即興でお母さんがかみ砕いて与えるみたいなイメージで、先生が咀嚼されて返したものは、お母さんの心にどんなふうに関くんだらう。そういうことも伺つてみたいと思います。

さらに言うと、大日向先生は一九七〇年代から社会的に表に

立って、母性愛神話、母性神話——この言葉の違いも先生は触れられていると思うんですが——からの解放をずっと語ってこられていきます。その中で、個人的にも、研究者としてもいろいろな痛みを感じられていると思うんですが、その痛みの中で咀嚼の知恵が生まれてくるような気がするので、そのあたりで何か伺えるかなと思いました。

それから最後、三つ目は「子育ては楽しい」を巡って何ってみたいと思います。これは新道さんや川口さんや濱田さんの研究の中にも、「子育ては楽しいですか」という質問肢で聞くと、すごく高い比率で「はい」とつける。何%でしたかね。あとでまた言ってもらえるかもしれませんが、けれども、インタビュアーで一对一のフェース・ツー・フェースとなると、個人名を研究の中に残さないと最初にご説明してあっても、「えっ」と迷う。そのあたりの、「楽しい」を巡ることをどんなふうに共有したらいんだらう。「子育ては楽しい」という大人の子育て中の感覚は、社会としてどのような意味づけ、価値観で抱えたいんだらう。動物行動のお話の中でも、何回も「楽しい」という問題が先生のご発言に出てきたと思うんですけども、「子育てが楽しい」ということを素朴に、人はどんなふうに共有したいのか。

というのは、支援の場にご夫婦で来ているお父さんがお子さんとして、「どうですか、いろいろ？」と聞くと、

「面白いですね。子どもはかわいいですね」と言う。そうするとお母さんが言いがちなせりふは、「だって短時間だけだもの。今だけでしょ。いいとこだけ持っていくじゃない」。そうすると、男性の心の中では、うっかり楽しいと意識したらつらいな、そのあと嫁さんから何か言われるな「という意識が生まれる」。つまり、楽しいと思う意識や、声に出す動きがベシヤベシヤとたたかれるんです。確かに短時間のほうが楽しいと思えば、かもしれないですね。長時間で責任がある局面が少なければ、「楽しい」は持ちやすいかもしれない。

ここで話は飛ぶんですが、新道さんたちの発表の中で自殺者の問題が出ていました。これは私の全く個人的な見解ですが、子どもの予想外の表情や動きやちょっとした一言から、「面白い」と三〇代、四〇代、五〇代、学長の話ですと六〇代、七〇代の人間が思わせてもらえるということは、それぞれの心の中の素朴な子ども心がいい意味で刺激してもらえない非常に大事なことだと思うんですね。そうなってくると、子育ては楽しいをどんなふうに考えたいんだらうということもぜひ伺いたいと思います。

以上が私の質問点です。長くなりましたが、高石先生いかがでしょうか。

〈討論〉

高石 ありがとうございます。三点ほどご質問をいただいたかと思っております。まずは、シンポジストの先生方から、それに対して連想されたことを、お答えをきっかけにしながらお話しいただいたらと思います。

まず一点目、お父さんたちの何かしら自信のなさというものがあって、自分のやっていることが子育てかどうかすらはっきりわからないという意識の中で、例えばオーストラリアであったり、南の島でもそうであると思うんですけども、中里先生はこういう場所で自分の子育てを可視化して伝えることができるといってお話をされた。それが自己確認や自信につながっていると思うんですけども、どういふところからそういうことができるようになっていくんだろうということのお尋ねではなかったかと思えます。

まず、一点目について、いかがでしょうか。

中里 では、私から。非常に重要なポイントを挙げていただいて、先ほどの時間でなかなか語りきれなかった部分とちようど重なっていますので、あまり長くなりないうように言ってみたくと思います。

まず、先ほどの人前で語るレベルで自信が持てるかという話で、そういうセッティング、環境づくりという話がありました。が、僕は今でも自信というのはいつもあまりありません。逆に、自信を持って子育てを上手にやっていると言うと、絶対に妻に非難されると思います。自信満々に語ることは自体はプラスになることがあるだろうかという疑問もあるので、どちらかという点、子育てについて語る一般的なセッティングについて話したいと思います。

私自身はこういう場で語れるようになったのは、あるとき聞き直って、自分をさらけ出そうと思ったことがあるんですが、生活の中ではかなり早い時点、自分の子どもが生まれた頃から、職場も含めて、意図的に語るようにしてきました。それは、男女共同参画の委員として関わったり、ジェンダー論に関心を持っている中で、女性が仕事で重要なポジションになかなかつけない原因として、「女の人に任せても、子どものことがあつてなかなか仕事をしてもらえない」とか、「すぐ帰ってしまう」と言われていたからです。女性だと子育てを理由に仕事がちやんとできないという社会的な意識があるとよく書かれていますし、実際そうだろうと思つたので、女性じゃなくても、子育てを理由に仕事を休んだり、穴は開けないにしても、どこかに語らなければいけない場面はあるんだと。女性じゃなくて、男であつても語るんだ。それこそ可視化するという事です。その

頃可視化という言葉は意識していなかったと思いますけども、語っていい社会になっていくためには、自分が言わなきゃいけないだろうという意識がすごくありました。場合によっては、鼻につくこともあり得るかなと思いつつもあえて語ってきました。

もう一つ、それが語りにくい背景として、少子化というものがあります。私も子どもの頃親から、「同僚の誰々の子どもが」という話を結構聞かされたんです。その当時は、同じような世代の同僚にみんな子どもがいるという時代だったけれども、われわれの場合は、職場で同じ世代の人で同じような年齢の子どもがいるという人を見つけるのが難しい。男の人にとっても難しいし、女の人も公園デビューとかしないとなかなか見つけない。それが難しいということで、語る場がないということがあります。あえて全然関係ない人にも語るということをしないと、自然に語る場がないのが今の社会の状況だろうと思います。私にとって語る場が見つかったのは、PTA役員をやったときです。お父さんとして参加したのは五人ぐらいいて、自営の人だとか、地元の工務店とか、県職員の人など、職場が近い人が多かったんですが、こんなに子どものこと、学校のことを知っているお父さんたちがいっぱいいるんだということに感動しまして、今PTA役員が一年終わっても、この間も同窓会のような飲み会をしたりしました。本当は男女混ざればいいと

思うんですけども、試みようとしてましたけれども突破できない壁で、僕は夜の時間のお父さんだけの飲み会はあまりいいものじゃないと思つていたのですけれども、楽しいのでついついやってしまふ。

そうすると、奥さんの愚痴が出るかと思いきや、結構子どもの、特に僕以外は同級生のお父さんが四人揃っていたので、「何組の誰々がどうの」という話や、子どもの友達とキャッチボールをしたという話を散々しているんです。よく知ってるなあと思いました。ですから、日本にはそういう場が少ないようですけれども、見つけていくとそういう人たちがいる場があることはある。

オーストラリアの場合は、お父さんと子どもが一緒にいる場面が多いために、仕掛けというほどではないんですけども、それを語る機会が多くなる。子どもと遊んでいる人だということとがわかるので、同然話題が出やすい。だから、子どもとお父さんが一緒にいる場で、お父さん同士で話ができる機会がなかなか持てないというのが日本の現状の問題かと思えます。

ちなみに、自分がこういうことを語ったり専門にする努力がちよっと報われたなと思つたのが、毎年四月、五月に職場で新任教員の歓迎会があるんですけども、この春、同僚で僕と近い世代の男性がやってきて、「当日奥さんが仕事でいないので、子どもを連れてきてもいいですか。(幹事の)中里さんだった

ら聞きやすいと思ひまして」と聞いてきたことがありました。そのときは、その同僚の男性教員の子どもさんと事務の女性の子どもさんがパーティに参加して、横っちょでみんなに遊んでもらって楽しんでいて、ある意味、職場での子育ての可視化ができました。語りやすい雰囲気を作るといのが重要だと思つた次第でした。すみません、長くなりました。

高石 ありがとうございます。父親として、あるいは子育てをする自分を自己確認していく、確立していくという点では、やはり誰かに向かつて語る。やはり他者の存在が非常に大事だということを思い浮かべながら聞かせていただきました。続けて、新道先生、よろしくお願いします。

新道 難しいですね。幾つか穂苜先生から言われて思つたこともあるんですが、ちよつとまとまらない感じがあります。とりあえずしゃべってみます。

まず、今日、非常に申し訳なかつたんですけども、冒頭で個人的なことをしゃべりすぎまして、時間が押してしまいました。そのことなんですけれども、パワーポイントのスライドを用意しているときに、これは五分でしゃべれるわと思つていました。一人八分の予定だったので、あと三分ぐらい余計にしゃべつてもいいかなと考えていたんです。そのようなところに、

シンポジウムが始まる前に、中里先生から今日発表予定のスライドを見せていただきますと、あのような形のスライドであつたわけです。で、「ああ、言つていいんや」と思ひまして、急ごしらえで、シンポジウムが始まる前二〇分ぐらいでネタ作りをしていたわけです。それでしゃべりすぎて長くなつてしまつて、すみませんでした。

それまでどうだったかというところ、父親の研究で学会発表もしましたし、このプロジェクトの公開研究会でやったこともありまして、子育て支援者養成講座で研究についてお話しさせていただいたこともあるんですけども、その中で自分も子育て中の父親であるということを言うべきかわざらざるべきかということをずっと迷っていました。なぜ迷っていたのか、今もちよつとわからないんですけども、やはり公と私ということがあるのかなと思ひます。それからもう一つ、特殊な事情かもしれないですけども、研究としてやっているんだということがあります。研究というからにはあまり私情を挟まないほうがいい、みたいなことがありますので、なかなか自分のことをしゃべりにくいままやつてきました。

でも、言わないでいると、なんか奥歯に物が挟まつたような感じがします。父親の子育てというものを高見から評論しているようで、あまりよくないなという感じがあつて、そこには自分の言をもぐり込ませたいとずつと思つていたので、今日やつ

てみました。発表のデータにもありましたけども、「子育ての話がしたい」という思いがあり、「でもなかなかできない」という思いもあり、一回やってみるとちょっとやりすぎちゃったというのが今日の状態だと思います。

それから、別の研究会と一緒に研究をしている独身の女性と子育てについて話をしている中で「パパ友はいないんですか」ときかれたことがありました。ああ、そうかと。そういうえないな、なんでやろうと思いました。

私は平日が休みなもので、平日に公園に行くことが多いんですけども、まず平日の公園にお父さんはいません。休日、祝日にシヨッピングセンターや公園に行くとお父さんはいるんです。そうやって眺めてみると、世の中にはお父さんと子どもという組み合わせで外出している方は結構いるなと思って心強い気持ちになるんですが、いざ公園で出会うと、近寄りがたい雰囲気を感じてしまう。

もしもこれが、気のいいお母さんだったら、「何歳のお子さんですか」と声掛けてくださって、こちらもちょっとやわらかい気持ちになれたりするんですけども、お父さんというのはなかなかこれを突破しにくい。これが何なのかわからない。でも、私がそう思っているということは、きっと相手もそう思っているんだらうなと思って、そのハードルを低くするにはどうしたらいいんだらう。それを突破して、パパ友になるにはどうした

らいいんだらうというのが私の個人的な課題です。その辺がまだわかりにくいところです。

高石 父の語りも聞かせていただきました。冒頭ご発表のときに、夕べ夜中にお子さんが急性中耳炎になられたと伺って、本当に近い距離で子育てをしておられるんだなと思いました。やはりパパが明日出番、晴れ舞台と思つて緊張がドンドン高まっていくと、おそらく子どものほうも同調して緊張が高まっていって、ある点を超えると発熱ということにだいたい至るんですね。

先ほどパパ友同士でいても、壁が超えられない、なかなかそこに行けない感じがあるとおっしゃられたんですけど、やはり男性というのはどうしても二つの世界があれば合理的な世界のほうにいる。大日向先生も「住む世界が違う」とおっしゃられたんですけども、一方の世界からもう一方の世界に飛び越えていくのはまだなかなか勇気が要る。最初に中里先生のような方がびよんと飛び越えると、後にばつとみんな統いていけるんだけれども、行きたいと思いが、すごく不安もあって、自信もなくて、足踏みしている。そういう男性の方たちも増えてきているのかなと思いました。

パパが緊張すれば、子どももテンションが上がって、という関わりが、穂苅先生がおっしゃった間主観的な世界での関わり

でもあると思います。自分と子ども、対象として分けて見る子育てではなくて、主客半分一体になったようなところを行きつ戻りつする。そういうところの体験を父親も語る。誰かの前に見せる。それによって、また自分で向き合う機会が増えていくのかなということも思います。

穂苺先生がご質問されたかたあたりとどうでしょうか。何かありましたら、お願いします。

穂苺 男性が子育て意識を心の中でも、声に出すという意味で自由になることと、女性が社会の中に仕事、あるいは仕事とは違う形で参加していくことには両方、トライアル・アンド・エラー——今日の新道さんの出だしの時間の配分の問題ではありませんが——の側面があるかと思いましたが伺いました。

高石 では、二つ目ですね。他世代との共有ということでした。特に大日向先生に対して、女性のいろいろな子育ての悩みに向きあっていかれるときに、住む世界が違ふところに行つて、そこで行きつ戻りつしながら、どうその世界を咀嚼して、お母さんたちの心に届けられるのだろうか。どうすれば伝わっていくのだろうか。そういうあたりをお伺いしたいということでした。

大日向 穂苺先生、ありがとうございます。そのご質問にお答

えする前に、穂苺先生は絆ということをおっしゃいました。絆というのはつながっているという意味で一般的に使われているけれども、離れる面もあるんじゃないかとおっしゃいました。穂苺先生のお話を伺いながら、絆についてある方が教えてくださったことを憶い出しました。絆というのはいとへんに半分と書く。細い糸を互いに端を持ち合つて、相手の息づかいを感じながら関係を作っていくことだということです。決して太い綱ではなく細い糸なんです。ですから、あまりこちらがぐつと引つ張りすぎるとプツンと切れてしまう。

そういうふうと考えていきますと、絆というのは、相手の息づかいを感じながら、いかにその場の関係性を大事にしているかということであると思います。そのときに自分がどういう立ち位置にいるのか。相手の方はどういう立ち位置にいるのか。つまり、自分と相手の方がどういう舞台に立つて、この時間を共有しているかということや常々考えていくことが必要だと思ふんですね。ミクロのレベルで言うと、個々の生活スタイルであり、マクロのレベルで言うと、時代背景であり、歴史であり、政策も含めて考えなくてはいけないということだと思います。

私は母性愛神話からの解放をずっと主張してきましたが、これがいつの時代にあつても、絶対的にユニバーサルに正しい主張だと思つたことは一度もありません。一度もないというのは語弊がありまして、当初は正しいと思つて言つた時期もありま

したが、大変なバッシングを受けました。私に対して石のつぶてを投げかけたのは、当初は男性ではなく、行政マンでもなく、母親だったんです。それも、私がまだ二〇代の後半ぐらいの時に、子育てをだいたい終えられた五〇代、六〇代の方々が、「あなた、なんてこと言うの。母親の愛ほどすばらしいものはない。だから、私は仕事も何もかもすべて捨てて、わが子の子育てに自分の人生を全部託したんですよ。それを『母親の愛がすべてではないんじゃないでしょうか』などというとは、あなたは子どもを持っていないから言えるんでしょう」と、もう烈火のごとく怒ったんですね。そのとき私は既に母になっていたんですが、私はとても怖くて、「私も母です」なんて言えなかつたです。言ったら、もつと怒られそうでした。

でも、そのとき、どうしてこの方々はこんなにもお怒りになるのかとも思ったのです。その方々は高度経済成長期を母親として生きていらした方がたです。男性が企業戦士といわれて、仕事に邁進する。一方、女性が家庭に入って、育児、家事に専念し、夫の働きを支える。こうした性別役割分業は、高度経済成長を支える体制として当時の社会的必然だったのです。その中で懸命に生きてきた方々でした。その生き方を私は否定するつもりはありませんでした。しかし時代は変わってきている、そういう考え方はもう時代に合わないという意味で申し上げたんですが、母性を神話と言われて怒り狂う方々の顔を見ながら、

私はこの方々の人生を否定したり批判したりする権利も権限もないということが、怒られたからではなく、同じ女性として本当に痛いほど胸に染みました。

それでもなお母性愛神話からの解放を三十数年一度も曲げずに言ってきたのは、時代の流れは、ベクトルは明らかに違ってきていると思ったからです。高度経済成長期のような性別役割分業体制では、日本のこれからの社会・経済は成り立たない。女性の人生も成り立たない。そういう確信があったから、母性愛神話からの解放を言ってきました。それだけのことなんです。

ですから、舞台が違ったら、この主張はなかったと考えています。絶対的な主張というのは人間関係の中ではないと思います。穂刈先生がいみじくも指摘なさったこと、もつとファジーなものがあるじゃないかとおっしゃいましたが、どこにファジーさを求めるかということが大切かと思えます。心理学を研究している人は、社会的、経済的、歴史的な問題にもつとシビアにアンテナを張ることではないかと常々自戒を持って考えております。

最後になりますが、夫と妻の言葉が食い違つて、月曜日、「こんなはずじゃなかった。あんな人に言わなきゃよかった」という思いを持って来るお母さんたちに、「住む世界が違う」と言うとき、その女性の痛みをどう分かち合うのかという質問

問でしたが、私は、その方々に、「住む世界が違います」と明言はしません。そんなことを言ったら傷つけますものね。明らかに住む世界が違っているとところで夫と言葉が違ってしまっていて、そこで苦しんでいる。そこに、「あなた、住む世界が違うでしょう」と言っても、「じゃ、どうしたらいいんですか」ということになります。

そうではなくて、私は体感していただきます。例えば私が施設長をしている子育てひろばへあい・ぽーとVではいろいろな講座をしています、その中に施設長の子育て講座というのを持たせていただいています。タイトルは子育て講座で、テーマも子育てなんですけど、そこでは子育ての問題にからめて、世界情勢、社会情勢、歴史的視点を折り込みます。ママとかお母さんとは意図的に呼ばずに、その方が呼んでほしいお名前、例えば「大日向さん」「高石さん」と名前で呼び合って、あたかも大学のゼミに近いような形でディスカッションなどをしてもらいます。

そうしますと、よくこういうご感想をいただきます。それは九〇分の講座なんですけど、「本当に不思議なことに数年前の自分が蘇ってきたみたいだ。背筋がピンとして、社会的言語が蘇ってきたみたい。そのときはわからなかったけれど、うちに帰ったら夫と対等に会話ができていた」と。「今まで夫は、『なんか悩みがあるんだったら、なんでも聴くよ。なんでも言っ

らん』と言ってくれたけど、いざ夫と向き合ってみると頭が真っ白になっちゃう。こんな会話は夫はつまらないだろう。同僚の女性はもつとウイットに富んだことを言うだろう。それに比べて、私の話題は半径三〇〇メートルしかない。そう思うと、頭が真っ白になりながら堂々巡りしていたけど、へあい・ぽーとVの講座の九〇分間、あたかも大学のゼミのように自分の意見を言ったり、自己紹介した時間を持ってだけで、うちに帰って、夫と対等に話げできた。これは本当にうれしかった」。そういうご感想をいただきます。

私は、これからの子育てで支援で子育てひろばは孤独からの解放の場であると同時に、そこに何らかの社会的な視野をもてる場でありたいと思っております。また、私は、言葉というのはとても大事だと思えます。言葉で自分を表現する大切さもわかります。でも、言葉で言えないこともある。言葉で伝えては、かえって傷つけることもありますね。

私は相手の話をきくときに、「聴く」ことを大切にしています。みみへんに、左に十の目と、その下に心と書きます。相談にみえた方には、もちろん語っていただきます。その語ってくださった言葉を耳で受け止めます。私はあまり話しません。でも、相手の言葉を聴きながら、この方の言葉は本物なのか、装っているのかということを見ます。十の目で見ようと努めます。言葉では「子育ては楽しいです。私、育児に自信を持て

ました」と言いながら、表情が曇っていることがあります。それを十の目でみつめる。そして最後に、心で受け止めるということをやらせていただいています。これは子育て真っ最中の悩んでいるお母さんたちと向きあうときに、私がいつも大事にしてきたことです。

高石 二つの世界のことを知的に伝えるだけでは、かえって傷つけることにしかならない。やはり体を使つて、そこに身体性ということも入つてくると思えますけれども、実際生をもつて行き来する。社会的な自分になってみる。自分を生きる時間を持つてみる。合理的な世界に行つてみて、また戻つてくる。子育てに専念している女性もそういう経験ができる仕組みを作つて、ホールディングして（抱えて）いく。そういう支援こそが心の痛みに寄り添うことにもなるという理解でよろしいでしょうか。まさに今実践を進めておられるということですね。臨床家の立場からしても、さらに臨床の中のエッセンスのところを具現化してやつておられることが窺えて、非常に感銘を受けました。

この件に関しては、ほかのシンポジストの先生はいかがですか。

穂荊 いろいろ伺つてみたいことがあります、時間のことも

ありますから。今の大日向先生の話は、私だけでなくおそらくフロアの方も伺つてみたいことをたくさんお話しいただいたので、すごくよかったです。

高石 そうしましたら、三点目に進みたいと思います。「子育てが楽しいか」というところですね。言説を巡つて、と言つたらいいんでしょうか。私たちの研究チームで、これをどう扱うかというのは長年のテーマになっています。政府や行政のやっているような子育て意識調査で「子育ては楽しいですか」と聞くと、母親たちは、ほとんど九割「楽しい」と答えてしまう。だけれども、現実にはいろいろな子育てのつらさを訴えて相談に来られる方たちは後を絶たない。虐待も決して減つていかないという状況で、そのギャップをどう考えるのか。子育てが楽しい、楽しいと答えるこの国で、どうして子どもが増えないのか。いろいろ疑問がある。

そういう中で一対一のインタビュー調査で踏み込んで尋ねていったときには、大日向先生の時代と違って、今のお母様たちは録音されていても、「楽しいですか」と何うと、なかなかやっぱりそうは答えられない。「楽しいかと言われると楽しくないわけでもないけれども、やはりなんとか」というところで、必ずどちらかに決められない、何とも言えない間のものが語られてくる。その続きにはもちろん非常にづらいこともあって、

「こんなに子どもを憎んでしまうこともあって」ということを、レコーダーがオンになっていてもどんどんあふれるように語ってくださる。

今はそういう状況があるんですけれども、今度はお父さんはどうなのか。お父さんもたぶん同じような状況なんですけれども、お父さんの場合はどちらかというところ、やはり「楽しい」「頑張る」というところで今自己確認をしようとしている傾向があるようで、それをどう支えていけばいいのか。男性、女性、子育て中の親に関わらず、より広い社会でそれをどう共有していけるのか。そういったところの質問だったと思います。

これについては、皆さんにお話しただけならと思いますので、根ヶ山先生のほうからいかがでしょうか。

根ヶ山 難しい問題だと思えますけども、私は動物行動学をベースにこういう問題をずっと考えてきました。例えば子育てでは、私なりの感覚で一言で言えば、子別れだと思えますね。子育てというのは、子どもを慈しむことがゴールではなくて、慈しむということを踏まえて、子どもを自立させていく。子どもを集団の一員として社会に送り出す。そういう役割をいつときサポートするのが子育てだと思えますね。

私の発表の中でもむしろ後半のほうに大事なことがあったはずなんですけど、私の準備が非常に悪くて、お話を聞きながらら

んどん話題を書き加えていったもので、話がまとまらなくなりましたが、子育てが子別れであるということ踏まえて言いたかったことは幾つかあります。

例えば子育てが楽しいかというのは、正確に言うと、楽しい部分もあるけども、不快な部分もあると思うべきだと思うんですね。子別れというのは、私の発表の中でも、ヤマアラシのジレンマという例えを出しました。子育ては美しい、ポジティブな部分もあるけども、ネガティブな部分もある。それを時々刻々調整するのが親と子どもの間ですね。それが子育てだと思えます。

その時々刻々調整するというのは、結局子どもも能動性を持って訴えている存在だということです。親も能動的な存在だけでなく、子どもも能動的な存在。うつとうしいことも働きかける。反発が出てきたりする。それをこちらの要求とすり合わせて調整していくのが子育てだと。そうする中で、程よい距離が生まれてくる。あるいは子が育っていくというイメージを持つべきだと思えますね。

そういうふう動物行動学を踏まえて人間の子育てを見ると、これが子育てだというイメージを勝手に美化している。もちろん親和性は子育ての一構成要素ではあります。重大なメジャーな要素だと思えますけれども、落ちてくるものがある。それも僕に言わせれば、実は子育てでなんです。

例えばうんちが出てきて汚いとか、子どもが言うことを聞かなくて泣いてもかまわない。あるいは重たくて暑苦しくて寄ってこないでほしいと思う。それも子育ての感覚なんです。それをうっとうしいなと思うことは子育ての反対のものではなくて、子育ての要素なんです。つまり、子別れをするために必要なメンタリティというか、感情なんです。

つまり、皆さんが持っている「子育ては楽しいか」と言うときの子育てが、ある偏り、ひずみの中でイメージを持っているもので、その物差しを使って日頃自分たちがやっていることを測ろうとするものだから苦しくなる。実は物差しのほうが狂っているんです。そんな感じがします。私たちの動物性みたいなものをベースにしたときに、もっと広い視野で子育ては何かというのが見えてくる。そのときの物差しは、私たちが子育てとか育児とかというものに対して持っているイメージとは違う感覚だったり、長さだったり、あるいは曲がっていたり、あるいはふにやふにやだったり、長くなったり短くなったり揺らいだりする、フレキシブルな変な物差しなんです。それが本来私たちの子育てというものを測る物差しのはずなのに、すごく硬い、まっすぐな等間隔なものを持って一生懸命測ろうとする。そんな感じがいたします。

先ほど「身体性」という言葉が出てきました。私は子育ては楽しいかということに対して答えるのに、一番のキーワードと

してそれを考えていたんです。私たちの体は、触られると気持ちがいいところがあります。触られると嫌なところもあります。あるいはいいにおいが出てくるところもあります。においだけじゃありません。赤ちゃんの顔はかわいしいし、肌触りはすべすべしていて、触れば気持ちいいし、でもうんちも出てくる。脇のにおい、足の裏のにおいって嫌なものです。全部体から出てくるんです。暑苦しいというのは嫌だ。でも、寒いときに触れてくれるとほんわかしてあったかくて気持ちいい。つまり、そういう両者の出会いの中で、身体はポジティブにもなったりネガティブにもなったりする。その総体として私たちは体を持っていくわけです。その二つの体が出会うのは親子だし、子育てだと思えます。

つまり、身体性として気持ちのいいこと、楽しいことは確かにあるわけです。お父さん、子育てを楽しんだらいいというのは、もっと素直にわれわれの動物性を踏まえて楽しんだらいい。つまり、楽しさというのは快であります。動物として快を求めなければ世代がつながっていかないわけですから、快は必ずあります。親の快と子どもの快というのはバイオロジカルにはどこかで絶対に予定調和的に疎通している。それが矛盾していたら世代が続いていかない。楽しいことをお互いにし合っていたら、それは自然に子育てがうまくいくという部分であるわけです。子育ては何かというときの物差しと、自分の体子ども

と触れ合って快だとするという物差しがずれているような気がするんですね。そんな感じを持ちます。

だから、身体の声をもう少し聞く。心理学で心の理論（セオリー・オブ・マインド）という言葉がありますが、私は体の理論、体の声を聞くということがすごく大事だと考えています。しかも、体というのは接触ということをもう一つ重要なこととされています。身体性、さらに言えば接触性ですね。身体接触（コンタクト）です。さつきも絆の話で、糸の半分同士を持って相手の息づかいが伝わる、とありました。それは接触が取り持つ身体性なんですね。そういう身体を持って、言わず語らず、言葉は必要でなくて、触れ合うことによって、同時にメッセージが双方向に伝わる。これは間主観的なことですね。

つまり、身体というのは、われわれは理屈で意味づけるようなことを、もう理屈をすつ飛ばしてどんどんやってくれているわけです。そういう能力を身体はちゃんと持っているんですね。そういう声をわれわれはあまり聞きとろうとしなくなって、バーチャルリアリティに走りすぎている。本来動物の子育ては、そういう体の声を聞けばうまく導かれるはずのものを、何か子育てではこうあるべきだ、愛とは何か、母性愛とは何か、父性愛とは何か、みたいなどころを定義して、べき論で実践においていこうとするから、すごく窮屈になって、しんどくなる。そういう感じを持っておりま

話がなかなか先に進めなくなっていますが、快というのは身体性をよく見つけることによって見えてくるものだろうと思います。今半分話を申しましたけれども、体をよく見つけると、うんちが出てきたり、汗かいたり、口臭がおったりするといふものも体なわけです。つまり、子育てというのはそういうものに対する関わりでもあるわけです。だから、子育ては楽しくったり、優しかったり、うれしかったり、快かったりするばかりではなくて、不快も子育てなんだということです。快も、楽しいことも楽しくないことも含めて身体がやっていることなわけで、そういうものをもっと偏見を持たずに、その揺らぎをおおらかに受け止める。そういうことがすごく大事だと私は思います。

今の子育てはすごくマニュアル化して、まっすぐな定規を当てるみたいなことが強くなりすぎていて、これをやったら間違いだろうとか、これはどうなんだろうとか、理屈がすごく先行しているように思います。快も不快も両方身体性を持っている本質的な属性なので、両方ともが子育ての全貌を成している。かつ、快だけじゃなくて、不快にも目をそらさないでそれを受け入れていくところから、逆にさつきのヤマアラシのジレンマじゃないですけども、不快のものも自分の属性として子育てとして受け入れていくことがあれば、また翻って快とか楽しいというところがより楽しくなれる。だから、これが子育てなんだら

うかとか、そんなことを考えること自体が既に大変理屈っぽく
なっていると思うんですね。楽しいことは素直にもっと楽しんで
だらどうでしょうか。

母体というか、女性の体は乳汁が出るし、妊娠もするし、男
性とはいろいろな生物学的な違いがあります。男性は攻撃性が
高い。「パパ友つていないのか」という話も面白いなと思って
聞いていたんですけども、それはオスの中にリンクしてネッ
トワークでやっていくよりも、個で競い合っつてのぎを削って、
アグレッシブに主張して、という側面がより強いのだろうと思
うんですね。そういった男性の身体性みたいなものと女性の身
体性みたいなものを見つめると、パパ友はママ友と同じように
できなきゃいけないだろうかと思えます。これもこだわり、と
らわれだと思っんですね。できなくたっていいじゃないか。男
性の身体性というのは、例えばさっき言った追い込み漁で沖で
網を張って待っているとか、ああいうところで具体的に見えて
いるのはお父さんの身体性が支えているような生活の側面なん
ですね。だから、身体というのは快と不快という以外に、生活
というものに密着していて、男性が持っている生活の中の身体
性みたいなもの、それを子どもに見せている。あるいは子ども
とシェアしていく。これがお父さんの役割としてあるのかなと
思います。

そうしたときに、別にパパ友でなくてもいいのかな。あるい

は子どもが小さいときよりも、むしろある程度大きくなってき
たときにお父さんの身体性は子どもとシェアできるようなっ
てくるのかなと。だから、子育てというのはもっと多面的に、
長い間尺の中で揺らいでもいいし、よくなったり悪くなったり
という中で身体性を踏まえて、もっとおおらかに受け止める、
ということがあってもいいのかなと思います。取り止めがない
ですが、こんなところです。

中里 先ほど「短時間だから楽しい」と言われると「楽しい」
と言いつらくなる」という話があり、私もそういうふうと言
いづらくさせるほうに加担しちゃっているのかなとちよつと思
います。イクメンにしても、かっこいいお父さんがあまり強調さ
れるのはあまり良くない傾向でもあるかなと若干思っている
ところがあって、こういう場でも、どちらかというところの太
変な面を語ってしまったります。逆に、特に子育て中のお母
さんに対する講演や講座の場では、それを語ると話を聞いても
らえるというか、共感してもらえるところがあるんですね。感
想文なんかを見てもわかります。ということはやはり、子育て
のかなりの部分がつらいとお母さんたちが強く感じていると
いうことだと思えます。

「楽しいと言うことはまずい」と感じて、「楽しい」と言え
なくなるというのは、自分と妻の間に感じ方のギャップがある

ということを自覚しているために言いづらくなるということがあるのです、そのギャップを埋めるような工夫をすると、楽しかったら「楽しい」と言えるようになるんじゃないか。

じゃ、どうしたらいいかというと、自分がつらい体験をもつとするとということと、奥さんが楽しく思える状況にさせてあげる。自分がつらい体験を一日中引き受ける経験をする事で、奥さんが短くて楽しい部分を感じられるようにすればいい。僕は、「つらい、つらい」とか「腹立った」とか、そういうことをあまり家で言いつぎているので、もう少し「楽しい」とか言わなきゃいけないかなと思うんですけども。そういう中で楽しかったら、子育てを楽しんでいることをわりとおおっぴらに言えるので、そのギャップを埋めていくために、奥さんにも短時間子どもと接するだけ、あるいは接しないで済んだ一日を作る。「接しないで済む」と言ってしまったら悪いですけども、久しぶりに子どもに会って、「ああうれしいわ」という気分を味わわせるチャンスを作る。それがないために、「楽しい」と言いづらいつらい思いになるんじゃないかと思います。

新道 このことに関しましては、インタビューの経験から少しお話しできるかと思いつながら聞いていました。「子育ては楽しいですか」というのはインタビューの冒頭のほうで聞くんですけども、先ほども出しましたように、「自分がやっているの

が子育てかどうかはわからない」という前置きがついたり、「楽しいですか」と聞いているのに、「うーん。好きですね」というようなこともあります。それから、やっぱり印象に残っているのは、「私は楽しいです」とか、「自分は楽しいです」という言い方ですね。これは、じゃ、誰は楽しくないねん？という話になりますよね。

おそらくその背景には、やっぱり奥さんというか、お母さんのことを意識されているのかなというのがあります。だから「自分がやっているのは子育てかどうかわからない」というのも、「自分は楽しい」というのも根っこは同じことですし、思わず「好き」と言い換えちゃうのは楽しむことに対する後ろめたさのようなものがあるのか。要するに、奥さん、お母さんへの申し訳なさを感ずるのかなと思います。

その申し訳なさを感ずるというのは、やっぱり奥さんが子育てですごくしんどい思いをしているんだということを重々理解されているということかなと思います。それから、子育てに関われない後ろめたさみたいなものも感じます。しかし関わっていないからといって、全部自分がやれと言われると、今度、それはそれで困るなという感じもあります。そういうことも含めて、しんどい部分をお母さんのほうに押しつけているような感じ、押しつけているとまで思っているかどうかわからないですけれども、そういう感じを何となく推測できるなという印象

を持ちました。

中里先生のように対処法、対策までは打ち出せませんが、ひとまずこういうことが推測されるのではないかとということだけお伝えしたいと思います。

大日向 子育てとか、子どもというのと、いつも「楽しい」と「好き」という言葉だけで語られるんですね。「楽しい」の反対は「つらい」。「子ども好きですか」と聞くと、好きか嫌いかわからないわけですね。学生に「子ども好きですか」と聞くと、好きな人は元気に「はい」と手を挙げます。嫌いな人はおずおずしてしまいうわけですね。

楽しいことがいいこと、好きなことがいいこと、その反対側、つらいとか嫌いというのは、当然ネガティブな印象になってしまいます。根ヶ山先生がさっきおっしゃったみたいに、人間の営みには、どんなことにもプラスとマイナスがあつて、それを全部ひっくり返るめて語れる言葉が何かあつたらいいなと、私は思います。

私自身の子育てとか子どもとの向き合い方を考えてみましても、若い頃はそんなに子どもが好きではありませんでした。むしろ苦手だったんですが、夫がすごく子ども好きで、夫の希望をかなえたくて産んでみたんですけど、いざ生まれてくると、こんなに面白いものはないと思いましたね。そして、すごくす

ごいとおしく思えました。

子どもと向き合っている夫の姿もとても楽しく面白かったですし、地域の方の関わり方も、子どもを介するとこんな関わり方があるんだと次々と面白い展開ができていく。何か一つのことがプラスかマイナスか、イエスカノーかで答えるしかないような言葉で考えるのではなくて、もっと別のワードで考えていくといいのではないかと。それは同じように、母性と言うと父性とVS構造になるけれども、穂苅先生がおっしゃったみたいに、もっとフアジーな部分を表す言葉が私も必要だと思います。

私は母性、父性という言葉に代わって、「育児性」という言葉をもっと考えてきました。それは育むということに焦点を置くと、好きとか嫌いとか、母とか父とか、女とか男ということを超えた要素が見えてくるのではないかと思つて、育児性という言葉も提唱してきました。

だいぶ昔ですけど、ある新聞が「これからは育児性の時代だ」と大きく書いてくれたんですね。そうしたら、私の大学の事務の方がその新聞を読んで、「先生がこんなことを外で言うから、昨日の日曜日は大変な目に遭つた」と言うんです。

「どうですか」と聞いたら、奥様が、「これからは母性の時代じゃなくて育児性の時代だとあなたの大学の先生が言っている。だから、あなたも育児せい」と言つて、子どもを丸一日預けられちゃつたとか。でも、「大変だったけど、結構楽しかつ

たです」とも言って下さいました。

子育てはなぜ面白いかというと、人間関係なり、地域のあり方なり、行政の施策の方針、全部つながって、社会や人との関係性の新たな面が見えたり、とてもドラスティックに変わることができるからだと思います。今日こうして子育てを一つのキーワードに皆さんのご意見を伺えたことも私は大変面白かったです。ありがとうございます。

高石 ありがとうございます。まとめをしていただいたような気がするんですけども、予定をしている時間がだいぶ近づいてまいりました。時間のゆとりがありましたらフロアの方からもたくさんご意見を伺いたいところですが、ちょっと叶いませんので、皆様にお配りしているアンケート用紙がございますので、ぜひご感想などをお書きいただいて参考にさせていただきますと思います。そちらのほうにお願いできたらと思っております。

非常に欲張りな企画でしたので、残念ながらシンポジストの先生方同士で突っ込んだ議論をしていただくことができませんでした。しかし第一部のほうで、いろいろな方向や視点から今の子育ての現状をどう見るのか、これからどこに向かっていけばいいのかということ、たくさんたくさんヒントと励ましをいただいたような気がしております。

今日のお話の中で、最初私は、愛着と分離の視点から見てもうと申し上げたんですけども、そういうあれかこれかというふうな思考自体、そういうごだわりからももう少し脱却しまして、例えば根ヶ山先生がおっしゃったように、父親も母親も次世代を育てるということに対しては、入れ子に何重にもなった大きなネットワークの構造があつて、その中の一つの要素になつているんだというぐらいの相対的な視点を持つことがまず一つ大事だということ、動物行動学という視点まで枠を超えて自分の固まった物差しをいったん崩して、そういう視点から見ることが非常に参考になると思いました。

それから、大日向先生、中里先生のお話からは、高度経済成長時代になってから公と私に分断されたこと、合理的で男性的な企業論理の社会と、子どもを育てる非常にプライベートな、閉塞的な家庭内の世界とに非常に大きな溝ができてしまったんだというお話がありました。けれども、これは子育ての長い歴史から見れば決して当たり前ではなくて、日本のここ数十年の特殊なことであつて、いくらでも変えていける余地がある。その一つの試みとして、男性も女性も両方の世界を行き来していくことを体を使って理解する。頭で理解するのではなくて、実際に両方を体験して、往復して、それを可視化していくこと、いろいろな人と共有していくことで、子育ての有りようは大きく変わっていくのではないかと思います。

それから、根ヶ山先生にはもう一つ、身体性というところから、子育てには快も不快もある。必ず対で反対のことがあって、それを込みでとらえないといけない。それは割り切れない、フアジーなどところでもあるんだけど、そこを体の経験を通して、もつともつと味わっていくことが大事だということを教えてくださいました。それが楽しい体験なんだということを男性も女性もちゃんと自覚して自信を持っていくためには、それが何らかの言葉になっていかないといけない。曖昧な、フアジーな「何なんだろう」というままではなくて、やはりちゃんと聞き手がいて、共有できる人がいて、フアジーなんだけど、それを表す何らかの言葉になっていってこそ初めて共有もできると思うし、楽しいことなんだと実感できていくこともあると思います。

子育て支援はいろいろな方面からのアプローチがあると思うんですけども、私たち企画者は臨床心理の立場ですので、ここからは、フアジーな、曖昧な、子育ては楽しいのか楽しくないのか、つらいのかよくわからないという、そこに寄り添いながら、言葉になっていくのを待つ。そういう関係を育んでいくことが大きな意味での子育て支援につながるのかなと感じさせていただきました。

まだまだ未消化の部分もあるかと思いますが、いっぱい元気づけていただいたと思いますので、皆さん方、それぞれの日常

にお戻りになって、今日のお話をどこかで生かしていただければと思っております。時間になりましたので、第二部を閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。「拍手」

〈終了〉